

<研究紹介>

立身出世 “趣味”としてのアイドル

Idols as a Hobby for Rising in the World (“Risshin-Shusse”)

辻泉*

Izumi Tsuji

I. 「推し活」の文化社会学

今日の日本社会や文化を語る上で、「推し」や「アイドル」といったキーワードは、もはや欠かせないものの一つと言って過言ではない。ひと昔前まで、特定の芸能人やキャラクターなどを熱心に応援するふるまいは、一部の熱狂的なファンによる特殊な趣味として捉えられがちであった。しかし今日においては、「推し活」という言葉も定着し、より広く一般的に見られる文化現象となっている。本稿では、近年実施された調査の結果やそれに基づいた論文や著作^{1,2)}の結果を紹介しつつ、国境を越えて広がるこうした文化の背景を探るとともに、「立身出世“趣味”」というキーワードから、「アイドル」と「推し」の実態について紐解いてみたい。

II. 2024 年日中若者調査から見える「推し」の現在地

文化社会学的な視点からアイドルを分析するにあたり、日本国内のみだけでなく、東アジアの国や地域との比較という視点でこうした現象をとらえることが重要となりつつある。そこで 2024 年夏に、日中両国の 15～29 歳の若者で、なんらかの「推し（愛好する対象）」がいる人、それぞれ 600 名を対象にしたオンラインアンケート調査（2024 年日中若者調査）を実施した。ここではその知見や、調査結果をまとめた論文や著作^{1,2)}にもとづきながら、その概略を紹介しつつ、議論を進めていきたい。

なお紙幅の関係上、ここで調査の詳細に触れる余裕が限られているため、この点については適宜同論文や著作をご参照いただきたいが、この調査では、主に、両国の若者がどのような対象を「推し」として認識していて、さらにどのように応援しているのかを比較・分析することを目的とした。

その結果から、まず全体的な傾向として、日本と中国の両国において、「推し」の対象として挙げられる割合は、アイドルが最も多くを占めることが確認された。アイドルもまた、J-POP だけでなく K-POP や C-POP など、さらに男性や女性、グループや個人などさまざまな形態がありうるが、これらの選択肢を足し合わせると、結果的に、「推し」として挙げられる割合においては、両国ともに、相対的にアイドルが一番多くなったのである。ただその一方で、歌手やスポーツ選手、ドラマ俳優、二次元のキャラクターなど、今日におけるエンタメ

* 中央大学

の形も多様であり、「推し」の対象もまたそのように多様化していることが確認されたのも興味深い点であった。

また、もう一つ興味深い結果として、こうしたアイドルを推すという傾向が、両国に共通して、男性よりも女性の間でより顕著に見られた点も挙げられよう。今日のアイドル文化において、女性たちが大きな「イニシアティブ」を有しているという点は、ジェンダー研究の観点からも、肯定的にも否定的にも注目すべきポイントといえよう。

Ⅲ. 「スター」の根強い中国

一方で、日本と中国の間には、「推し」の対象に関する興味深い違いも存在していた。端的に言えば、中国においては、いわゆる「スター」と呼ばれるにふさわしいタイプの人気の根強さがうかがえたのである。ここで言う「スター」とは、圧倒的な才能やカリスマ性を持ち、一般の人々からすれば手の届かない、まるで空に輝く「星（スター）」のような存在のことをいう。

たしかに、「推し」として認識している対象について、複数回答の選択肢を足し合わせると、相対的には中国でもアイドルの割合が多くなるのだが、一方で、最も「推し」ている対象を個人名で挙げてもらおうと、その上位に挙がってくるのは、中国では、個人で活躍しているような歌手や映画俳優、そしてオリンピックのスポーツ選手などだったのである。

よって中国においては、身近で日常的なアイドルの人気も広まりつつ、それと同時に、「絶対的な憧れの対象としてのスター」と、それへの非日常的な熱狂が根強く存在していることがうかがえた。また、調査対象サンプルの違いにも慎重ではあるべきだが、「推し」に費やす金銭面などにおいて、中国のファンたちの方がよりアクティブな様子がうかがえた点も、興味深い結果であった。

Ⅳ. 日本に特徴的な「推し」

対照的に、日本における「推し」は、より複雑で特徴的な変化を遂げてきたといえるのではないだろうか。先にも触れた関連の論文や著作^{1,2)}などでも述べてきたことだが、日本における「推し」には、いわばかつてのスターと、少し前のアイドルの特性とが、入り混じっているように思われるのである。

「少し前のアイドル」とは、1990～2000年代にかけて興隆した、いわゆるグループアイドルが登場してくるまでの段階、そして「推し」という言葉が一般的になる前までの存在をイメージするとよいだろう。キーワードは親近感であり、未熟さである。より具体的には、「あわよくば、お付き合いできるかもしれない」ような疑似恋愛の対象であったり、「クラスの中の2～3番目の人気」であったりするような、日常的で身近な存在について、ファンたちが「その成長過程を見守りながら、応援しつつ育てていく」文化であり、男性アイドルでいえば、旧ジャニーズ系において、研修生であったジュニアと呼ばれたアイドルたちが、

やがてメジャーデビューを果たしていくようなプロセスはまさにそれに該当していたといえるだろう。

一方で今日の日本における「推し」はそれだけではないようだ。むしろ「恋愛対象」であったり「きょうだい」「友達」といった存在と見なす割合は、かなり低くなっていて、むしろ「憧れたり、尊敬する存在」とする割合が一番多かったりもする。

だが、「憧れたり、尊敬する存在」とはいつても、かつてのスターと異なるのは、誰もが同じ対象を画一的に崇めているのではなく、むしろ「推し」の対象は細分化し多様化しているということ、そして、疑似恋愛の対象ではなくなりつつあるものの、依然として「成長する様子を見守る」存在ともされる割合が高いという点が、「少し前のアイドル」とも共通しているということなのである。

いうなれば、今日の日本社会において、「推し」に求められているのは、単なる未成熟な親しみやすさだけでも、あるいは圧倒的に手が届かないスター性だけでもないのである。すなわちそれは、高度なパフォーマンス能力（スターになれるかもしれない特性）を持ち合わせながらも、努力や葛藤を包み隠さず共有して、ファンたちと共に歩んでいくような親密さ（少し前のアイドルの特性）を併せ持った、ハイブリッドな存在であることなのではないだろうか。

V. 立身出世“趣味”としてのアイドル

こうした日本社会に特徴的な状況を理解する上で、キーワードとなるのが、タイトルにも掲げた「立身出世“趣味”としてのアイドル」というフレーズである³⁾。

かつて、高度経済成長期ごろまでの日本社会においては、人々は自らの努力を通じて社会的な地位達成を成し遂げ、豊かな生活を手に入れるという「立身出世主義」の物語を共有し、それを目標としてきた⁴⁾。また、そうした人々が崇めたのがかつてのスターであった。

しかし、低成長期を迎え、先行きが不透明な今日の社会に至ると、そのようなわかりやすい成功物語を多くの人々が共有することは困難にならざるをえない。むしろ今日の若者たちは、それでもどうにかサバイバルしていかないといけないこうした困難な状況下において、個別に細分化した、自身の努力の「ロールモデル」のようなものを「推し」に見出しているのではないだろうか。典型的なのは、複数のアイドル（候補生）たちが登場するオーディション番組のありようだろう。

数多存在する対象の中から、自分とマッチする「推し」を見出し、「推し」がデビューに向けて血のにじむような努力を重ね、やがて厳しいオーディションを勝ち抜いて、大きなステージへと駆け上がっていくそのプロセスを、リアルタイムで追跡し、金銭と時間を投資して応援すること、これこそが「個人化したスター」の「成功物語への成長物語」を楽しむような文化、すなわち「立身出世“趣味”」なのではないだろうか。いわば、「推し活」とは、単なる娯楽や消費というよりは、個人化したファン自らの「立身出世のシミュレーション」

のようなものともいえるし、その点でファンたちは、アイドルの成長という物語を共に紡ぎ出すプロデューサーであるとともに、伴走者でもあるともいえるのではないだろうか。

VI. これからのエンタメと文化社会学

本稿では、「推し」と「アイドル」をめぐる現象について、文化社会的な視座から考察をしてきた。それが単なる一時的な娯楽や消費というよりも、むしろ時代変化であったり、国や地域が置かれた社会状況とも色濃く関連した現象であることがうかがえた。

今後、AI などのテクノロジーもますます進化するだろうし、さらなるグローバル化の進展も予測されよう。そうした中で、アイドルだけでなく、各種のエンターテインメントやそれをめぐる現象もめまぐるしく変化を遂げていくことだろう。今後も引き続き、こうした現象に注視しながら、文化社会的な研究を続けていくことが肝要と言えよう。

文献

1. 辻泉, 2025, 「「推し」への行動と意識に関する比較社会学的研究—2024 年日中若者調査の結果から東京圏大学生調査の結果から」『中央大学社会科学研究所年報』中央大学社会科学研究所, 29 : 235-260.
2. 辻泉, 2025, 「オーディション・スタディーズに向けて—グローバル化する、立身出世“趣味”の時代」太田省一・塚田修一・辻泉編『アイドル・オーディション研究—オーディションを知れば日本社会がわかる』青弓社 : 263-283.
3. 辻泉, 2024, 「「立身出世”趣味”」としての「推し」—2022 年東京圏大学生調査の結果から」『中央大学社会科学研究所年報』中央大学社会科学研究所, 28 : 197-214.
4. 見田宗介, 1967=2012 「立身出世主義の構造」『定本見田宗介著作集Ⅲ 近代化日本の精神構造』岩波書店 : 180-221.